

食

を担う

丹後・中丹の人

空き地の目立つ宮津の市街地を、肌を刺す冷たい風が吹く。

午前十時。木崎靖之さん

(49) 〓宮津市漁師〓は、

狭い路地にある民家の前で軽トラックを止めた。荷台を開け、作ったばかりの総菜をトレーに詰める。「おばあちゃん、来たでー」。

引き戸を開けると、奥の部屋から大西あいこさん(82)の明るい声が返ってきた。大西さんは五年ほど前からひざを痛め、二年前に腰を骨折。近くのスーパーにも行きづらい。木崎さんとも世間話をし、昼食用のほうれん草の白あえとカレイの塩焼きを手にとった。「近所の人と分けるから、持ってきてな」。時々食べたくなるすき焼きも、夕飯用に注文した。

木崎さんが営むのは、行商の魚屋。二十一年前から続ける。当初は鮮魚や干物中心だったが、一軒一軒訪

ねるうちに、独り暮らしのお年寄りが料理する難しさを知った。

高齢者の支えに

その後、自ら簡単な総菜を作り始めた。「買い物に行けないじいちゃん、ばあちゃんが多い。安心して食べてもらいたいやん」

食材に使うのは、ほとんど地元で捕れた魚や新鮮な野菜。今では総菜が充実した。大根煮やだし巻き、焼豆腐煮…。食べやすく、飽きがないように味付けに工夫を凝らす。

木崎さんの朝は早い。五時すぎ、朝市で食材を仕入れ、店で調理を手伝う。従業員の女性と交代しながら、一日約五十軒を回る。夕方に戻り、夜、魚を干すこともある。

つらい経験もした。八年前。「白髪頭のおばあちゃん」に、年越し用にと届けられたかまぼこや茶わん蒸し

生きる楽しみ届けたい

① 魚と総菜の行商



「今日は「ロケケうまいで」。玄関まで出づらいうお年寄りに家の中まで総菜を届ける木崎さん (左) 〓宮津市蛭子

た。木崎さんの思いは強まった。「誰だっておいしいものを食べたい。それは、生きる楽しみ。待っていてくれる人に、届けたい」

雪の日の行商は寒さが身に染みる。凍てついた細い道の運転にも気を遣う。でも、そんな日だからこそ、お年寄りは心待ちにする。

「助かるんやで」。喜び顔に会いに行く。

(小山愛生)

が、年明け、そのままたつの上にあった。「おばあちゃん」は風呂場で亡くなっていた。以来、頼まれれば薬や日用品も持つて行く。急に体調を崩したお年寄りを病院に自分の車で運んだこともある。

病を乗り越え

忙しい仕事のため一時

期、精神的な病になった。しかし、一カ月間の入院中も、お年寄りの食事が気が掛かり、申し訳なさと焦りが募った。八十歳になる母が行商を代わったが、再び、回れるようになった時、温かく迎えてくれたのはお年寄りだった。「こんな自分も、大事にしてもらってる」。初めて気づい

「おいしくて、安全なものをお届けたい」と、日々がんばる「食」の担い手が府北部には、たくさんいる。信念を持ち、時には厳しく、それぞれの夢の実現に向けて活動する姿を追いながら「食」の宝庫である府北部の魅力や課題を探る。

〓8回掲載の予定です。